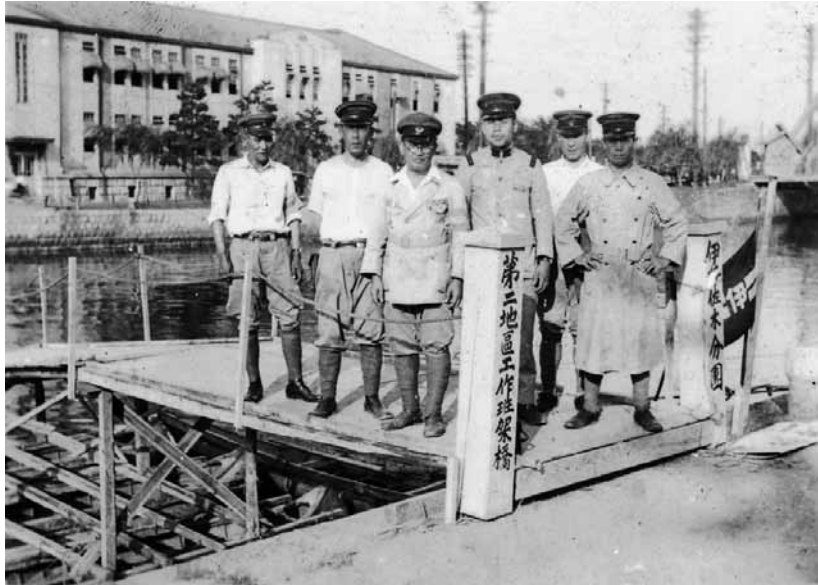


市史通信

【目次】

- 戦死の記録
 - 一日中戦争における戦死
- 横浜の古着商と「駿河屋」
 - 倉田家資料について
- 閲覧資料紹介
 - 『戦記 甲府連隊』
 - 『甲府聯隊写真集』
- 市史資料室たより



防護団の架橋訓練 派大岡川にて 1935（昭和10）年前後
向かって右から2人目が竹内進三 背後の建物は横浜市役所 竹内春男家資料

第34号

【発行日】2019年3月31日
 【編集・発行】横浜市史資料室
 〒220-0032
 横浜市西区老松町1番地
 横浜市中央図書館・地下1階
 【電話】045-251-3260
 【FAX】045-251-7321
 【E-mail】
 so-sisiryou@city.yokohama.jp
 【ホームページ】
<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/gyosei/sisi/>

戦死の記録

一日中戦争における戦死

戦死公報

日中戦争・太平洋戦争におけるおびただしい戦死・戦病死は、どのように家族に伝えられ、地域においてどのように受け止められたのだろうか。地域や家族が戦死者をどう迎えたのかは、公葬や慰霊など様々に取り上げられている。『横浜市史Ⅱ』第一巻下（横浜市一九九六年）においても、区民葬の実施と学校や町内会・青年団の参加が紹介されている。

一方、軍あるいは国および区市町村は戦死をどう把握し、家族にどのように伝えたのだろうか。いわゆる戦死公報が封書で家族に届けられたことは、周知の通りである。封書の他に、電報が送られる場合もあった。文面はいずれも、戦死の期日と場所だけを簡潔に記したもので、電報の場合は日にちと戦死の事実のみを伝えている。

日中戦争開戦当初からしばらく、通知・通告など様々な書式であったが、次第に印刷された死亡告知書の様式に必要事項を書き入れるかたちに統一されていったようだ。また、差出主は軍の各部隊であるが、戦後は軍の事務を引き継いだ県単位の地方世話部から送られた。市町村への死亡報告は、戸籍法に基づいて「官ニ於テ処理」するとされてきた。したがって、報告を受けた市町村が遺族に改めて通知することも

あった。

この他、中隊など所属部隊から詳細な戦死状況報告書（表題は概要など様々）が、家族に送られた。戦死に至る経緯を、より具体的に記したものである。また、部隊長名で手紙が送られる場合もあった。戦闘詳報の記録と、兵士一人一人の異動や功績などを名簿に記載することは、部隊にとっての義務であり（兵士のなかにその事務担当が置かれた）、部下が戦死・戦病死した場合は、それらに基づいて遺族に報告するのは部隊長の役割であった。

しかし、横浜市史資料室が所蔵する兵士に関する資料のなかで、このような報告書は竹内春男家資料の一例のみ、戦死に関わる部隊長からの手紙も同資料の他に一例が確認できるのみである。戦死に関する資料は他にもいくつかがあがるが、いずれも戦死通知の他は慰霊に関わる資料が中心である。

竹内進三の戦死

ここでは、戦死に関する文書が一通り揃っていると思われる竹内春男家資料を中心に、戦死の記録を紹介していきたい。竹内春男さんの父進三さん（中区扇町）は、日中戦争開戦間もない一九三七（昭和一二）年九月九日に召集され、二二日に上海に出征、翌月一五日に戦死する。当時三〇歳、妻と当時四歳の春男と二歳の男の子がおり、母ちうと同居していた（以下、敬称は略させていただきます）。



竹内進三等の出征見送り 中区扇町 1937 (昭和12)年9月8日
最前列向かって右から2人目が竹内進三 竹内春男家資料

進三は上陸後一ヶ月も経たずに戦死するが、上海周辺は激戦となり、多くの犠牲が出ていた。進三が編入された第一四九連隊は、一〇月末までの戦闘で兵力は三分の一になったという。つまり、三分の二が負傷か戦死によって損耗したことを意味する。なお、以下甲府連隊については、『甲府連隊写真集』（国書刊行会、一九七八年）による。

さて、竹内春男家資料には、軍隊手帳、進三の甲府連隊（歩兵第四九連隊）現役入営から召集・出征、そして区民葬に至る写真アルバム、召集から上海上陸後一〇月一三日までの便り、戦死を伝える電報、戦死通告、戦死状況報告書、部隊長からの手紙と現地の写真、連隊長からの慰霊祭開催報告、区民葬

関係資料、勲章伝達式通知、さらに陸軍墓地忠霊塔に合葬の通知など、一連の資料が残されている。戦死後、現地部隊から遺品が家族のもとに送られたので、戦地で受け取った便りをはじめ、認識票や御守り、千人針、腕時計など本人の主な持ち物もこれには含まれる。

軍隊手帳は、兵士の軍歴を知るための基本資料であるが、それによると、竹内進三は一九〇七（明治四〇）年二月六日生まれ、住所は中区扇町。身長五尺五寸というから約一六七センチメートル、靴は一〇文七部なので二五センチ半、他に帽子や軍服・外套のサイズも記されている。一九二八（昭和三）年一月一〇日に甲府の歩兵第四九連隊に現役入営、機関銃隊に入隊した。同年一月二六日に帰休除隊している。その際、善行賞を付与されているので、勤務ぶりは優秀だったのだろう。

その後、一九三一年一〇月に一ヶ月間の勤務演習に応召、一九三七年九月九日に充員召集される。同日、歩兵第一四九連隊機関銃中隊（津田部隊仁科隊）に編入され、九月一八日には神戸港を出帆、二二日に虬江碼頭（上海）に上陸した。二五日以降、上海北方の蘆藻浜クリーク渡河作戦に参加、そのなかで一〇月一五日に戦死するに至る。

竹内進三の場合、現役入営で教育を終え、勤務演習も経験していたため、召集後すぐに出征、実戦に参加している。出征見送りの際の写真に見られる明るい笑顔から見れば、やはりあっけない

最期といわざるを得ない。

『尽忠録』

この他、竹内春男家の一連の資料には、「伊東部隊合同慰霊祭式典」の写真三枚と、伊東部隊が作成した『支那事変記念写真帳 第一集』（一九三九年二月一日発行）、そして神奈川県が発行した『尽忠録』（一九四二年二月二八日発行）という文献がある。伊東部隊とは第一〇一師団のことで、師団長が伊東政喜だったので伊東部隊と称した。第一四九連隊が所属していた。上海での激戦を終えて、翌三八年一月二九日に上海の光華大学構内で合同慰霊祭が開催された。写真三枚は、その模様を写したものである。『写真帳』は、一年半の間に伊東部隊が参加した戦闘が記録されている。

『尽忠録』は、満州事変以降一九三九年までに戦歿した神奈川県に本籍を持つ兵士の記録である。全一三九五人一人ひとりの顔写真をかけ、生年月日から応召日、所属部隊、戦死の日にちと場所、葬儀の日にちと場所、そして軍における経歴をそれぞれ記したものである。応召日や部隊名、地名の一部は秘匿されている。この内、現在の横浜地域に本籍を持つ者は、五一二人を数える。

この五一二人を見ると、津田部隊と明記されている者は一五二人、もちろん竹内進三も含まれる。上海および江蘇省で戦死した者は一二三人、次いで

江西省が九一人と多い。いずれも、津田部隊や伊東部隊の行動範囲である。また、注目されるのは、ノモンハン事件（一九三九年五月〜九月）で戦死した者が五五人もいることである。

戦死時期については、一九三七年が一三九人、三八年が一六八人、三九年が二〇二人、その他不明二人、一九三二年一人となっている。不明の内一人はノモンハンで戦死しているのが三九年、もう一人は江西省なので三八年以降と思われる。徐々に増加傾向にあるが、一九三七年については九月からの四ヶ月間に集中しており、緒戦の激戦ぶりがここからもうかがえる。

この『尽忠録』と写真帳は、非売品ではあるが印刷された文献である。しかし、これまでほとんど未紹介で、とくに『尽忠録』については書誌情報も全く見当たらず、存在が初めて確認された貴重な文献といえよう。こうした資料が遺族のもとに残されていたことは注目される。非売品であることから、遺族に贈られたものと推測され、遺族に対する手厚い対応がうかがえる。

戦死状況報告

戦死状況報告書は、一連の資料のなかでも軍の対応を最も象徴する資料といえる。軍において将兵が日常的に行動を共にする中隊レベルの部隊では、一人ひとりについていねいな対応をしていたことがうかがえる。

時系列的に一連の資料を見てみると、

最も日付が早いのは、戦死当日の一〇

月一五日付となっている中隊長仁科万蔵名の「戦死状況」である。これには、一〇月一八日付の妻竹内樟子宛送り状がついている。簡潔ながら、一三日からの戦闘状況と戦死の経緯が具体的に記されている。それによると、機関銃手として正面の敵を倒したが、横からの敵の機関銃弾が命中、胸部貫通銃創によって戦死したという。即死状態だったようだ。このように、現地部隊ではいち早く「戦死状況」を作成したが、家族に届いた日には不明である。

一方、甲府から戦死を知らせる電報が残されている。横浜中郵便局の一〇月九日の消印が押され、「オウギテウ」「タケウチシヨウコ」宛、本文は「一〇ツキ一五ヒタケウチシンゾウドノメイヨノセンシセラル」、その後「ホ四九テフ」とある。「ホ四九」は、甲府の歩兵第四九連隊（留守隊）のことだろう。なお、妻の名前は本来は「くすこ」と読んだ。

その後、先の「戦死状況」も、原隊である甲府連隊から、同文の写しが徳永部隊長徳永徳（甲府連隊留守部隊長か）名で、改めて十一月二日に妻宛に送られている。また、十一月二六日付で、同じく徳永部隊から上等兵への進級が通知された。さらに翌年一月二八日に、徳永部隊から竹内進三の戦死に関する正式な通告が出されている。「歩四九留人普第七一号」の文書番号、部隊長印の押された、いわゆる戦死公報

に該当する文書である。

なお、この直前一月二五日には、上海の津田部隊（歩兵第一四九連隊）の宿営地において、連隊の慰霊祭が行われ、遺族に連隊長津田辰参から報告の手紙が送られている。四六九柱の慰霊を行ったとあり、上海での戦闘が一段落した段階の死者数を示している。

横浜の郷土部隊―甲府連隊

なお、その後も津田部隊の戦死者は増え続け、甲府に帰還する一九四〇年二月（前年八月に連隊長が国方慶三に替わっていたので当時は国方部隊）までに、一四〇〇人にのぼった。戦傷病者は五〇〇〇人におよんだ。連隊の当初人員は、およそ三二〇〇人であるから、戦死・戦傷病者あわせて六四〇〇人という数字は、この間にちょうど連隊全員がそっくり二度入れ替わる数に相当する。

実は、甲府の各連隊はこの第一四九連隊に限らず、それぞれ大きな犠牲を出している。歩兵第四九連隊は日中戦争開戦前の一九三六年から満州に派遣され、国境警備などに当たっていたが、一九四四年二月に第三大隊がグアム島に派遣されて全滅、続いて八月には残余の全部隊がフィリピンのレイテ島に派遣されてほぼ全滅、最後に生き残ったのは九八人だけだったという。

この他、甲府で編成された歩兵第二一〇連隊、および北海道旭川で山梨・神奈川両県出身者を含めて編成

された歩兵第二二〇連隊は、共に一九三九年に北支に派遣された。両部隊は、一九四四年四月に南方転進を命じられたが、二一〇連隊はフィリピンの手前バシー海峡で輸送船が魚雷を受けて沈没してほぼ全滅、二二〇連隊はマニラに無事到着した後ニューギニアに向かいセレベス海で同じく沈没したが、多くは救助されて上陸を果たしたという。

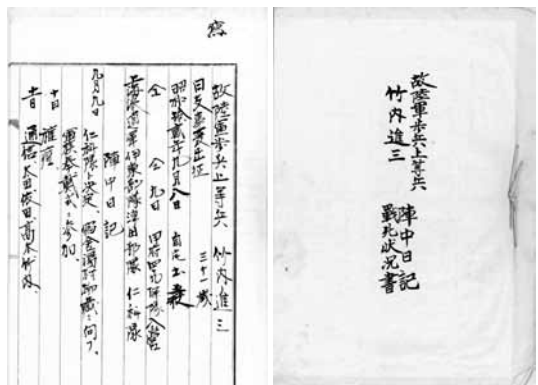
太平洋戦争で、甲府の第四九・二一〇両連隊がほぼ全滅する一方、日中戦争初期に第一四九連隊は連隊の半数近くが戦死している。横浜や神奈川県出身者も、多く犠牲となったと思われる。横浜出身の陸軍兵士が最も多く戦死したのはフィリピン（二二％）、次いで中国（一九％）であったことも符合する（『市史通信』第二七号、横浜市史資料室、二〇一六年）。

神奈川県は山梨県と共に甲府連隊区に属し、徴兵事務は甲府連隊区司令部が担当し（一九四一年に横浜連隊区司令部が置かれる）、陸軍の歩兵の場合、甲府連隊に入営することが多かった。郷土部隊が地元になかったためか、戦後の横浜では、横浜出身兵士にあま

り関心が払われてこなかったように思われる。戦友会等の活動やその記録も、あまり残されていない。

もちろん、横浜出身兵士がすべて甲府連隊に配属されたわけではない。また、都市横浜には地方に本籍を持つ寄留者も多く、横浜から出征した兵士の

敬啓軍兵上等兵 竹内進三 戦死状況書



故陸軍歩兵上等兵竹内進三陣中日記戦死状況書 1937（昭和12）年10月 竹内春男家資料

実態を見るには、様々な部隊や戦地の実情を一つひとつ確認していく必要がある。

戦死者の慰霊と論功行賞

竹内春男家資料にはこの他、「故陸軍歩兵上等兵竹内進三 陣中日記 戦死状況書」という綴りがある。これは全文が、筆で手書きされている。その内「戦死状況書」は、先の一〇月一五日付「戦死状況」と同文である。「陣中日記」は九月八日の自宅出発から始まって一〇月一二日で終わっている。本人の「陣中日記」を書き写したのではないかとと思われる。いつ家族のもとに届けられたかは不明であるが、一〇月一五日付「戦死状況」の原本と考えるのが妥当ではないかと思われる。

また、一二月一九日、横浜公園球場において中区合同区民葬が開催されて



竹内進三の戦死場所に建てられた墓標 1938(昭和13)年頃
竹内春男家資料

合、死後上等兵に進級しているの
一四〇〇円が授与された。一九三八年
八月一日付授与証が残されている。ま
た、翌年一月二四日に県庁で勲章伝達
式を行うという一五日付通知が、甲府
の徳永部隊長名で出されている。

この間に、一九三八年一〇月には、
靖国神社合祀、および招魂式、臨時大
祭挙行の通知が届けられた。さらに、
一九四四年七月一〇日付で、甲府の陸

軍墓地忠霊塔に合葬の許可がおりた旨、
東部第六三部隊(甲府連隊)長から通
知が届いている。戦死にともなう一連
の慰霊と論功行賞に関わる過程は、以
上のように進められたのである。

一九三七年一〇月の戦死から、戦死
公報・戦死状況報告の送付、区民葬・
現地慰霊祭の開催、死没者特別賜金授
与、勲章授与、靖国神社合祀、陸軍墓
地忠霊塔合葬と、一連の過程に関する
資料が、竹内春男家資料にはほぼ揃っ
ており、それによってこれらの経緯を
明らかにすることができたのである。

竹内進三と家族

次に、戦死報告や便り、写真など資料
の内容を、もう少し詳しく見てみたい。

竹内進三の軍歴については、先に軍
隊手帳をもとに紹介したが、召集時に
は五年半の予備役を終え後備役につい
ていた。その間、一九三〇年・三一年・

三四年・三六年に簡閲点呼、三一年に
勤務演習の記録がある。さらに、写真
には現役入営時、出征見送り、そして

区民葬の他、おそらく防護団での
架橋訓練と思われる写真が残され
ている。

一ページに架橋訓練の写真掲
載しているが、向かって右から二
人目が進三である。もう一枚、派大
岡川に架橋された舟橋と共に写る
写真もある。服装や伊勢佐木分団
とあることから、防護団と思われ

る。進三のような兵役を経験した在郷
軍人が、活動の中心を担っていた。横
浜市の連合防護団は、一九三二年九月
一日に発団式を開催しているので、こ
の写真は、それから一九三七年九月に
進三が召集されるまでの間に撮影され
たものと思われる。

また、この写真は、別の意味でも貴重
である。背景に写っている建物は、実
は当時の横浜市役所なのである。右奥
に横浜公園、右端に港橋が写り込んで
いる。この横浜市役所は、関東大震災
後に木造で再建された仮庁舎で、そも
そも写真が少ない上に派大岡川側から
の写真は珍しい。

一九二七年発行の『横浜市要覧』(横
浜市役所)に「横浜仮市役所」として
掲載された写真が、港橋方向から撮影
したものである。これ以外に派大岡川
側の壁面が写った写真は、今のところ
確認されていない。この後市役所は、
一九四四年に空襲に備えて老松・東両
国民学校に移転し、旧庁舎は翌年五月
二九日の横浜大空襲で焼失している。
出征見送りの写真は一〇枚以上ある



出征前の家族写真
1937(昭和12)年9月8日
竹内春男家資料

が、竹内を含めてタスキをかけた人物
が五人写っており(進三のタスキが残
されている)、町内からこの日五人が出
征していったと思われる。他に、九月
八日出発と日取りを記した張り紙のあ
る竹内の自宅前で、母と妻、二人の子
供と共に普段着で写した写真が残され
ている。結果的に、これが最後の家族
写真となった。

出征見送りの様子は、のぼり旗がた
くさん掲げられ賑やかで、本人たちの
表情も明るく、笑顔も見られる。あの
ような激戦がすぐに待ち構えていると
は、予期していなかったのだろう。上
陸後間もなく戦闘に参加したため、戦
地の写真は、戦死後の墓標や慰霊祭等
の写真があるだけである。

一方、遺骨出迎えから横浜公園球場
での合同区民葬の写真がやはり一〇枚
以上あり、なかにおそらく自宅前と思
われる家族、関係者の集合写真が含ま
れている。春男は小さいながらも軍服
で礼装姿である。合同区民葬の集合写
真にも、同様の姿が春男ともう一人見
られる。なお、自宅前の写真をよく見



中区合同区民葬の日の家族写真 自宅前
1937（昭和12）年12月19日

竹内春男家資料

ている（一〇日付）。

家族に心配をかけまいとの配慮とはいえ、面会まで不要というのはやはり相当楽観的に考えていたことがうかがえる。しかし、さすがに一二日の面会日には、母と妻と子どもが甲府に來たと陣中日記には記されている。この間、種痘、予防注射を済ませ、荷造など出發準備に追われ、一六日午前一時過ぎに甲府を出發、一二時に神戸着、車内でさらに注射を打っている。神戸では民家に分宿し、一八日午後二時半乗船、四時に出帆した。

ると、軒先に「支那派遣軍人」という表札がかかげられている。

戦地の現実

九月八日、自宅を出發した進三は、甲府駅に着いてすぐ、無事到着とこれから兵営に入ること、葉書（普通郵便）で母に書き送っている。

以下、陣中日記と便りから紹介する。翌日午前一〇時入営、身体検査の後津田部隊仁科隊配属が決まる。宿舎は兵営外の湯村温泉で、「大変楽だそうです」と母に伝え、面会日もあるが「別に心配をする事ありませんから、都合で御知らせ致しません」と書いている（「ちゅう宛九月九日付葉書」）。妻宛の葉書でも、戦地への出發まで「宿舎泊りで愉快に日を送って」といると書き送っ

さらに二二日に無事目的地に上陸して、それぞれ母宛の葉書を送っている。陣中日記の二二日には、上陸後の「新栄行軍中死体多シ」との記述がある。すぐに戦地に入ったことをうかがわせる。行軍中は、農家に宿営したり村に露営したりした。二五日には、「大隊本部ニテ老母二名死刑、機関銃ニテ子供二名死刑」、さらに「老母四名死刑」との記述がある。死刑の理由は書かれていない。この翌日、「敵兵五六〇米前方ニ若干アリ」と、いよいよ前線に到着したようである。処刑は、そのあたりと関係があるのかもしれない。しかし、いかなる事情があろうとも、戦闘員とは思われない老母や子供を処刑したと陣中日誌に記されていることは直視する必要がある。

こうして、いよいよ戦闘態勢に入り、以後塹壕を掘り、野営が続き、夜襲を受け、陣地を構築していくという日々が続く。そして、一〇月三日頃からクリーク渡河作戦に直接参加していったようだ。六日には戦友の戦死、分隊長等の負傷が記され、その後も一日・一二日と戦友の戦死や負傷の記述が続く。そして、そこで陣中日記の記述は途切れている。

戦死と向き合う

この間、「無事で活動して居るから安心せよ」とだけ走り書きされた、一〇月一日消印の母ちゅう宛葉書（普通郵便）が送られている。そして、一〇月一三日と日付の入った妻宛の絵葉書（軍事郵便）が、最後の便りとなるのである。全文を紹介しよう。「新聞で御承知の通りと思ひますが、中々の激戦ですが幸無事に居りますから御安神下さい。母上始め皆様御変わりもありませんか。子供は充分御注意下さい。皆さんに宜敷く。」この葉書には、「十月廿四日入」の書き込みがあり、おそらくその日に自宅に届いたものと思われる。竹内進三は、この間一五日にすでに戦死している。先に述べたとおり、戦死報告が届いた日付は不明、戦死の電報は一月九日消印ということで、最後の葉書を受け取った段階では、まだ戦死を知らなかったのではないかと思われる。

激戦という言葉が家族がどう受け止めたか、そして母と子を思う気持ちはどう伝わったか、そして戦死を知った時どう感じたのか、家族の切実な思いは想像する他ない。戦死を知った後、部隊との間で交わされた便りのなかに、家族の思いが表われていると思われるものがある。一九三八年一月二一日付の徳永部隊から母に宛てた葉書（公用）と、三月五日付の仁科万蔵から母宛の手紙は、竹内進三の遺骨凱旋の際に護送した兵士を家族が照会したことに対する回答であった。後者の手紙では、甲府まで護送したのは仁科隊の者だが二、三日で上海に戻ったので、横浜まで護送した者は別で不明だと答えている。各部隊からの回答の文面から推察すると、母を始め家族としては遺骨を護送してくれた者にお礼を言いたいとい問合わせようだ。当時は、遺体を回収する余裕もあり、実際の遺骨が届けられたのであろう。せめてお礼を言いたいという家族の心情には、遺骨を前にして、戦死という事実をどうにか受け入れようとする思いが込められているのではないだろうか。満州事変以降、大陸での戦闘は続いてきたが、銃後に暮らす当時の市民にとつてまだ戦争は非日常であった。そんななかで容赦なく突きつけられた家族の戦死に、どう向かい合うか、当時の市民にはまだ準備は整っていないかつたのかもしれない。日中戦争開戦間もなくの出征と戦死は、いきなり市民が戦争の現実と直面せざるを得なかったその実情を表している。（羽田博昭）